

研究ノート

## イタリアにおける plurilinguismo の歴史的変遷 —1975年の民主的言語教育の提言まで—

西 島 <sup>より</sup> 順 <sup>こ</sup> 子

キーワード : plurilinguismo、複言語主義、イタリア、民主的言語教育、トゥッリオ・デ・マウロ

### 要 旨

本稿は、1970年代にイタリアにおいて言語教育の概念へと発展した plurilinguismo の起源と概念の変遷を、それまでの言説の検討を通して解明するものである。民主的言語教育と呼ばれるこの言語教育は「複言語能力」「複言語教育」「複言語教育政策」の観点からみると欧州評議会の唱道する複言語主義と親和性がある。イタリアにおける plurilinguismo の創出は1950年代の文学界に見られるもので、ダンテの複数言語の使用を形容したことに始まる。当初、plurilinguismo は規範性のない文学として否定的な意味で用いられたが、その後、複数言語の使用を評価する論者たちによって肯定的に受容されるようになり、1960年代になると言語学においても plurilinguismo が考察され、その背景にある少数言語話者の社会的地位や言語権などが明らかにされた。1970年代に入り、言語学者トゥッリオ・デ・マウロはこの plurilinguismo の概念を援用し、民主的言語教育を構想する。しかし言語学はこれまで、複数言語使用の概念を好意的に受容してきたわけではない。にもかかわらず、イタリアでは1950年代の文学界は複言語使用に肯定的な価値を見出し、1970年代には早くも複言語教育として展開されたのである。

### 1. はじめに

本稿は、イタリアにおいて萌芽し、言語教育の概念へと発展した plurilinguismo の起源と変遷を、これまでの言説にもとづき明らかにし、その概念と評価の変容を解明する。

なお本稿では、Common European Framework of Reference for Languages（以下 CEFR）によって一般的に認識されている plurilinguisme/plurilingualism を複言語主義と訳し、イタリアにおいてこれまで論じられてきた plurilinguismo については CEFR の提唱する複言語主義と区別するためにイタリア語のまま用いる。

現在、言語教育界において認知されつつある複言語主義は、複文化主義と共に、2001年に欧州評議会が CEFR 等により唱道した理念である。この複言語・複文化主義とは、それぞれの文化背景の中で広がってゆく多様な言語体験が、個々人の中において複数の言語・文化能力として相互関係を築き、作用しあう状態を承認し、その複層的な能力を認めることである（Council of Europe 2001）。複言語主義は 1956 年にフランスの社会言語学者コーアンがスイスを「多言語国家」と形容するために使用したことに始まり、1990年代後半から欧州評議会の言語政策において議論され、コストとムーア、ザラトの研究チームが 1997 年に発表した研究に由来する（西山 2010：24）。ところが、これとは政治的文脈の異なる 1970 年代のイタリアにおいて、*educazione linguistica democratica*（以下「民主的言語教育」と訳す）が提言される。そこには複言語主義と親和性が認められるのである。

民主的言語教育とは、イタリアの言語学者トゥッリオ・デ・マウロ（1932-2017）が提唱した言語教育改革であり、1975年に *Società di Linguistica Italiana*（SLI：イタリア言語学会）の分科会である *Gruppo di Intervento e Studio nel Campo dell'Educazione Linguistica*（GISCEL：言語教育研究介入グループ）から *Dieci Tesi*（10 の理論）と題され発表されたものである。この *Dieci Tesi* は言語教育に関わる理念を 10 節に分けて示しており、その内容は主に、I～IV：口頭言語を中心とした言語能力の複数性と複雑性の認識、V～VII：伝統的言語教育の批判、VIII：民主的言語教育の提案、IX～X：学校改革や教育編成の提案から構成されている（GISCEL 1975）。この言語教育の提言が生まれた背景には、イタリアでの言語統一の遅れと、それによる学校教育の不平等があった。

イタリアは 1861 年に国家統一を遂げたものの、デ・マウロによれば、その当時のイタリア語（フィレンツェ語）<sup>1)</sup> の使用者は全人口の 2.5%<sup>2)</sup>、多く見積もっても 8～10%にすぎず、長きにわたって少数言語話者や方言話者が学校教育を満足に享受することがなかった。この問題は 1960 年代においても解消されず、イタリア語を知らない大多数の下層階級はそれを自覚することもなく、統一言語が教育の障害になっていることにすら気付かない状況にあった（Ferreri & Guerriero 1998：16-17）。デ・マウロはその状況に危機感を抱き、民主的言語教育を提言したのである。

この民主的言語教育は、2000 年以降、複言語主義との親和性が指摘され（Costanzo

2003)、有意義な言語教育であったとの再評価がなされている (Balboni 2009 ; Lo Duca 2013)。実際のところ、民主的言語教育の提唱者デ・マウロは1960年代から plurilinguismo という用語を用いており、1975年には民主的言語教育の重要性を主張する論文において *educazione plurilingue* (複言語教育) について言及している (西島 2018)。なお1975年とは *Dieci Tesi* が発表された年でもある。イタリアの plurilinguismo と CEFR の複言語主義との親和性は指摘されるものの、両者は政治的背景も時代も異なるものである。

本稿では、1970年代以前のイタリアにおいて plurilinguismo がどのような文脈で創出され、議論されてきたのかを明らかにし、デ・マウロが plurilinguismo に教育的価値を発見するまでのプロセスを解明する。

## 2. 民主的言語教育にみられる plurilinguismo

### 2.1. 複言語主義の多義性

イタリアにおける plurilinguismo を振り返る前に、複言語主義の多義性をまず明確にし、民主的言語教育との親和性を明らかにする。

複言語主義の多義性に関して、欧州評議会が *Linguistic diversity to plurilingual education: Guide for the development of language education policies in Europe* (Council of Europe 2007) において言及し、複言語主義を主に四つに分類している。

第一に、複言語主義は教育問題に関わる。複言語主義は、これまで以上にヨーロッパ人の相互コミュニケーションを促進するため、各国の外国語教育に関するシラバスの改善を求めている。言語知識は商品とサービスの自由な移動や情報と知識の交換、そして人の移動に不可欠とみなされている。また、複言語主義は、教育システムの中で学習言語の提供数を増加させることも目指している (Ibid. : 37)。

第二に、複言語主義は多言語状況に関わる。ヨーロッパには現在220以上の固有言語の変種があり、そのうちの約40言語が国家語である。そこには移民や難民の言語は含まれないが、それらを含めるのであれば、その数は数百に及ぶ。複言語主義とはこのような現代ヨーロッパ社会の実情、つまりこの地域には多様な言語が共存するとの実態を認識させる役割を持つ (Ibid. : 37)。

第三に、複言語主義は能力に関わる。複数言語を共有する個々人の言語能力はすべての話者が持つ優れた能力であり、言語教育政策の役割の一つは、話者にそのような能力を認識させ、その価値を評価し、他の言語変種へと拡張させることである。このように複言語能力はコミュニティにおける多言語状況を維持するための前提条件の一つとな

る (Ibid. : 38)。

最後に、複言語主義は複言語教育政策に関わる。国家は民主主義の価値を教育するのみならず、域内の言語やヨーロッパの言語、またその他の地域で話されている言語をも振興する。各国が同じ民主的空間に属しているとの意識を強化するためにも、複言語教育の実施が不可欠である。(Ibid. : 39)。

このように、欧州評議会は複言語主義の多義性を認識しており、複言語主義が「複言語教育」「多言語状況」「複言語能力」「複言語教育政策」に展開することを明らかにしている。では、1970年代のイタリアの民主的言語教育にこのような意味での複言語主義の特徴が認められるであろうか。そこで次に、民主的言語教育と複言語主義の親和性を検証する。

## 2.2. 民主的言語教育と複言語主義との親和性

Dieci Tesi は民主的言語教育を提言する文書だが、複言語主義を示す plurilinguismo という用語を用いていない。しかし、Costanzo (2003) はそこに欧州評議会の訴える複言語主義との親和性を見出す。コスタンツォは、民主的言語教育がイタリアからヨーロッパ全体へ展開が可能な複言語・複文化教育の先駆であったと主張する (Costanzo 2003:10)。民主的言語教育には言語権や表現の自由、マイナー言語の尊重といった考えとともに、単一言語を基盤とする国語教育を制御する発想が含まれることから、欧州評議会の複言語主義との親和性を認めることができるのだ (Ibid. : 18)。このようにコスタンツォはその親和性を指摘してはいるが、その論文は Dieci Tesi の概説に留まっており、また、親和性に関して歴史的検証を行っていない。

そこで、ここでは Dieci Tesi を再検証し、欧州評議会の複言語主義との親和性を詳らかにする。まず、能力について検証する。Dieci Tesi は、「Ⅲ. 言語能力の複数性と複雑性」において、産出能力として口頭言語と書記言語、また会話・質問・返答能力を示す。また、受容能力として、読み、聞くことで得た情報に意味を与える能力や、様々な状況を、言語を通じて分類・分析する能力を取り上げる。さらに産出・受容能力を通してすでに獲得した言語資源をより拡張する能力など、多様な能力を提示している (GISCEL1975 : 2)。次に、「Ⅷ. 民主的言語教育の原則」においても言語能力に触れ、個人や身近な言語文化上のそれぞれの背景を前提としたうえで、生徒たちの言語資源を徐々に拡張し、豊かにすべきであると喚起している。また、生徒が属する集団内で個々の言語の違いを発見することは、その社会を構成する言語資源の空間的、時間的、地理的、歴史的多様性の経験となり、探求を深める原点となる。多様性の理解や尊重を促進することは、他者

の抑圧を受けることなく生きるすべを得る第一歩である (Ibid. : 9-10)。IIIとVIIIはいずれも、CEFR の複言語能力に関わる箇所に類似している。たとえば、IIIの能力は、言語技能の複数性を示すもので、産出能力と受容能力に分類され、さらにそれが技能別に細分化されている点で CEFR の言語能力観と共通点がある。また、VIIIの論及する能力は、生徒の個々の環境に基づく言語変種を第一に考えるもので、その言語能力を獲得しながらも、社会に存在する言語の多様性への気づきを与えることに関わる。そして、その多様性を認めることは自己肯定をも促すものである。Dieci Tesi は、個々が持つ言語変種を出発点として、その社会に必要な複数の言語能力の拡張を図り、他者への理解を伴いながら、個人の社会的自主性の確立を目指している。これは CEFR が相互理解や社会統合を目指し、複数の言語能力の獲得を推奨していることに相似している。

次に、教育とその政策を検証する。「IX. 教師のための新たなカリキュラム」では、教師はそれまで伝統的に行われてきた模倣や反復による言語教育を見直し、言語の多様性を認める民主的言語教育の方針に基づいた新たな教育の推進を強く訴えている (Ibid. : 11)。また、「X. 結論」では、民主的言語教育の実現には言語や教育に関わる教員養成や情報を担う適切な組織が不可欠であり、これは各地域の行政や市民の問題、さらには政策の問題であると説いている。つまり、最後の二節は、複言語教育を進めるためには現場の教師や教育を改革するための地域に適した政策が必要であると主張する (Ibid. : 12)。これも CEFR が推進する政策に極めて近い。

このように、1975年に発表された Dieci Tesi には「複言語能力」や「複言語教育」、「複言語教育政策」といった複言語主義の要素が見られる。つまり、欧州評議会が1990年代後半に複言語主義を議論する20年前に、イタリアの言語教育では、イタリア半島の多言語状態を背景とした複言語能力、複言語教育、複言語教育政策の必要性が訴えられていたのである。しかし、この「複言語主義」がゼロから生まれたとは考え難い。では、イタリアにおける plurilinguismo がいかに創出され、議論がなされていたのか。そして、その提唱者であるデ・マウロはそこにどのような教育的価値を見出したのか。次に、イタリアにおける plurilinguismo をめぐる先行研究や文献を参照し、分析と考察を行う。

### 3. イタリアにおける plurilinguismo の史的議論

#### 3.1. イタリアにおける史的研究

イタリアにおいて現在、議論されている plurilinguismo は欧州評議会の発表した複言語主義を踏襲するものであり、その歴史的変遷を検討する研究は少ない。しかし、その中

でも、近年、**plurilinguismo** の史的考察を行った Curci (2005) と Orioles (2006) の二つの研究が注目に値する。

クルチは、**plurilinguismo** の起源をウィーン生まれのロマンス語学者マリオ・ヴァンドルシュカ (1911-2004) が 1970 年代に「我々の自由な精神の言語空間」として提唱した **Mehrsprachigkeit** (イタリア語の **plurilinguismo** に相当) に求めた (Curci 2005)。ヴァンドルシュカは、この用語を二つに分類し、標準語や専門語、話語、隠語、方言の間を日常的に移動する能力のことを「内部的複言語」と、それに対して母語に加えて複数の言語を習得する能力を「外部的複言語」と形容した (Ibid. : 60)。

ヴァンドルシュカは 1970 年代に **Mehrsprachigkeit** についての考察を展開し、それまで人間の言語を絶対化し、神格化していた言語学、いわゆる構造言語学を批判した言語学者である。言語はそれを用いる人間と同様に不完全な存在であると主張し、その非体系性を説いた<sup>3)</sup>。ヴァンドルシュカは、構造主義の束縛を離れた社会言語学の視点に立ち、複言語能力の存在を認めているのだが、クルチはここに **plurilinguismo** の起源を見出しているのである。しかし、クルチはイタリアにおける **plurilinguismo** には言及しておらず、本稿が対象とする 1970 年以前のイタリアにおける **plurilinguismo** の展開を検討するための議論を提供してはいない。

一方、オリオレスはイタリアを含む欧米の研究を視野に入れ、ヴァンドルシュカ以前に **plurilinguismo** の起源を求める研究を行った (Orioles 2006)。この研究は **plurilinguismo** の発生とその変遷、そして **plurilinguismo** とバイリンガリズムの共通点と相違点の三つの論点を論じている。そこで、ここでは本稿に関わる **plurilinguismo** の発生とその変遷について取り上げる。

まず、**plurilinguismo** の発生について検討する。オリオレスは、**plurilinguismo** とバイリンガリズムの起源を 19 世紀末、ドイツを代表する歴史言語学者ヘルマン・パウル (1846-1921) や、同じくドイツの混合言語研究を行ったフーゴ・シュハルト (1842-1927) によって論じられはじめた「言語の混用」<sup>4)</sup> の理論に求めた。オリオレスによれば、この理論は、人間は単一の言語を話すと考えてきたそれまでの言語観を逸脱するもので、人々を困惑させる一方で、これがバイリンガリズムや **plurilinguismo** 研究の大きなページを開くこととなった。その後 20 世紀になるとフランス社会言語学の先駆者といわれるアントワヌ・メイエ (1966-1936) が言語変化に関わる研究やヨーロッパ全体の語彙研究を進め、そのような研究がバイリンガル研究の発展に貢献したとオリオレスは推察している (Ibid. : 199)。

パウルは「言語の混用」について論じ、「言語は、個人の言語以外に存在しないという

ことを出発点とすれば、すべて二人の個人が語り合うと直ちに引き続いて言語の混用が行われるということができる。この場合に話すものが聞くものの言語に関する表象群に、影響を与えるからである」(パウル 1993 : 669) と主張し、個人、また言語そのものは音韻、形態、意味などに外国語<sup>5)</sup>の影響を受けると分析している。今では当然と考えられる言語の転移現象が、当時の言語学界においては新鮮であり、人間は単一言語を話すものと考えられていた固定観念に疑問を投げかけたのだった。オリオレスはこの 19 世紀末に議論された「言語の混用」論に着目し、個々人に現れる複数言語の混交に対する認識をバイリンガリズムや plurilinguismo の原点と考えた。

次に、plurilinguismo の変遷を検討する。オリオレスは、イタリアにおける plurilinguismo の動向を分析し、1951 年にイタリアの文学界において、イタリアの文芸批評家であるジャンフランコ・コンティーニ (1912-1990) がルネッサンス期のペトラルカらの作品を unilinguismo、ダンテの作品を plurilinguismo と形容したことに言及する。この用語はイタリアの映画監督であり詩人でもあったピエール・パオロ・パゾリーニ (1922-1975) も引用したことから、当時のイタリアに plurilinguismo が存在し、またその反響があったと推測している (Orioles 2006 : 200)。その後、1962 年には、イタリアの言語学者ヴィットーリオ・ピサーニ (1899-1990) がドイツの文献学者テオドル・エルヴァート (1906-1997) の著書を評するにあたって<sup>6)</sup>、バイリンガルの翻訳に plurilinguismo を使用したことを指摘している (Ibid. : 201)。また、デ・マウロが用いた plurilinguismo に関しては、脚注で簡潔に言及するのみで分析は行っていない (Ibid. : 201)。このように、オリオレスはイタリアにおける plurilinguismo の変遷に言及はするものの、それは断片的で、plurilinguismo の概念の形成過程を論ずることはない。

### 3.2. 史的研究の考察

Curci (2005) と Orioles (2006) の研究はイタリアにおける plurilinguismo の変遷を十分に解明していないが、plurilinguismo の起源に関しては注目すべき共通点がある。起源とする年代は異なるものの、両者は、「言語＝単一言語」という固定概念を覆す理論に plurilinguismo の起源を求めている。19 世紀末にパウルやシュハルトは「言語の混用」を論じ、1970 年代にヴァンドルシュカもまた、構造主義を否定し、言語の不完全さや非体系性を説いたが、いずれもその対立軸には、絶対化された言語が存在していた。その言語観に対する新たな理論が、現在の plurilinguismo につながるとクルチやオリオレスは分析したのである。

また、特にオリオレスは plurilinguismo とバイリンガリズムを根本的には同じ現象と認

識していた。では、言語の混用や個人の複数言語使用、バイリンガリズムは、その当時の言語学においてどのように語られてきたのであろうか。例えば、フランスの言語学者アンドレ・マルティネ（1908-1999）は以下のように述べている。

これまでのところ、bi- もしくは plurilingualism は、言語病理学に属する特異で異常な状態と広く考えられてきた。

(Martinet 1952 : 440/拙訳)

ここでマルティネは、複数の言語使用は医学的に異常な行動と認識されていることを指摘している。オリオレスも「言語の混用」論が人は単一言語を話すと考えられてきた言語観を逸脱したものとして人々を困惑させた指摘したように、複数の言語使用は正常な行動とはみなされていなかった。また、時代が下り、バイリンガリズムの史的研究 (Cummins & Swain 1986 ; Baker 2011) が行われるようになると、バイリンガルが否定的に評価された時期の存在が指摘された。19 世紀初頭から 1960 年代まで、多くの研究者はバイリンガルが思考には有害であると考えていた。なぜなら、バイリンガルや認知に関する初期研究では、口頭による IQ テストにおいて、バイリンガルはモノリンガルに劣るという結果が一般的であったためである (Baker 2011 : 140)。歴史を見ると、複数言語を話す状態は特異で決して好ましい能力ではなく、バイリンガリズムや plurilinguismo は高く評価されるものではなかったのである。

二つの史的研究から、plurilinguismo の創出と過去の評価に関する手がかりを得ることができたが、これらはイタリアにおける plurilinguismo の変遷と言語教育への展開を明らかにするものではない。そこで、次にイタリアにおける plurilinguismo の創出と言語教育へと至るまでの史の変遷を詳細に考察する。

## 4. イタリアにおける plurilinguismo の形成過程

### 4.1. イタリアにおける plurilinguismo の創出 (1950 年代)

イタリアにおいて plurilinguismo という用語が誕生したのはオリオレスも指摘した通り、1950 年代である。語源や例文が記載されたイタリア語の主要な辞書である *Grande Dizionario della Lingua Italiana* 『イタリア語大辞典』(1986) および *Grande dizionario italiano dell'uso* 『イタリア語用例大辞典』(1999) を参照すると、後者はコンティーニが手がけた論文に plurilinguismo の起源を求めている<sup>7)</sup>。

コンティーニはイタリアの著名な文芸批評家の一人で、論文“Preliminari sulla lingua del Petrarca”「ペトラルカの言語に関する前提」(1951)において、ルネッサンス時代の作家ペトラルカによる *Canzoniere* 『叙情詩集』に使用されている音韻を研究し、同じくルネッサンス時代の作家ダンテの使用言語との比較を行っている (Contini 1951)。コンティーニは二人の偉大な作家の言語を比較するにあたり、新たな文芸批評の用語と概念、すなわちペトラルカの *unilinguismo* とダンテの *plurilinguismo* を提示したのである。

*unilinguismo* とは、洗練され、統一性のあるペトラルカの使用言語を指すもので、コンティーニによれば、ペトラルカの言語は入念に作られ、古典的であり、熟考され、機知に富んだ表現形式を保ちながらも、その異種のスタイルが一つの型へと集約される特徴を持つ。コンティーニはその一貫性のある言語使用を *unilinguismo* と形容したのである (Ibid. : 21)。

一方、*plurilinguismo* とはダンテの使用言語を指す。ダンテはラテン語や俗語<sup>8)</sup> を使用しただけではなく、多様な文体や音韻、また社会階層の違いによる語彙を共存させた。その観点から、ダンテの作品は第一に *plurilinguismo* であると断言している (Ibid. : 5)。

コンティーニの両者に対する文学的評価は明確に分かれている。まず、ペトラルカに関して以下のように評している。

伝統を重んじたペトラルカはそれ(言語の多様性を)を否定し、少なくとも制限した。しかし、イタリア文学の出発点をペトラルカと断言するには、まさにその裏付けが必要である。(中略) 国民文学としてのイタリア語を見れば、シチリアの学校には、レンティーニが定めた書法があり、1230年代や40年代の10年間にもその書法が用いられていたとわかる文書が残る。それと同様に考えるならば、有効な(文学の)伝統は、一定の音韻や適度な規則をもつ言語の定義となったペトラルカの文学が始まりであったといえる。私たちの文学の出発点はより豊かで、より創造的な才能、もしくは、ずば抜けた知性にあるのではない。ダンテ、少なくともダンテの『神曲』にあるのではない。私たちの文学の出発点はペトラルカの口語にあるのであり、ペトラルカの『叙情詩集』にあるのだ。

(Ibid. : 5 /拙訳/ ( ) は引用者による補足)

コンティーニはイタリア文学の創出を論ずるにあたり、まずは規範となる形式を重視している。また、それを論証するために、13世紀のシチリアの学校で、詩人のレンティーニが定型化した十四行詩のソネットをあげ、その一貫した書法によって詩が確立して

いたことを提示し、文学には規範となる形式が必要であると提言している。そのうえで、その規範が見いだせるペトラルカの文学をイタリアの嚆矢とし、高く評価したのである。

コンティーニによれば、文学の基礎は古典的な詩から入念に作り出されたもので、繰り返される基本原理に結びついている。つまり、文学とは進化した一定の言語形式によって判断されるもので、そのため複数性に反する (Ibid. : 5)。つまり、精査され、ある形式へと統一された言語、すなわち *unilinguismo* であることが、文学的な価値を持つと考えていた。

一方、ダンテの *plurilinguismo* に関しては以下のように評している。

多数の文体や語彙が混在している。それは、卓越した技法でも、奇抜な技法でもなく、読者に対して、ありふれた言葉を並べたまでである。(中略) *Vita Nuova* 『新生』から *De vulgari* 『俗語論』(中略)、70 年前に「言語の哲学」と呼ばれるきっかけとなった *Convivio* 『饗宴』から *Commedia* 『神曲』に至るまで、ダンテの言語的多様性を立証するのが困難なことは想像できるであろう。

(Ibid. : 5-6/拙訳)

コンティーニはダンテのいくつかの作品を例にあげ、そこに見られる言語の複数性は意図的に表現されたものではなく、月並みな単語の羅列であり、言語規則の解明は困難であると考えた。規範や形式を重んじる文学の観点から見れば、ダンテの粗放にも見える *plurilinguismo* は評価し難いものであった。コンティーニにとって、ダンテの文学的特徴である *plurilinguismo* はペトラルカの *unilinguismo* に比べて、評価が低かったのである。

この論文は *plurilinguismo* に関して、次の三点を提示している。まず、イタリアでは *plurilinguismo* という用語が文学界において創出された。コンティーニはペトラルカとダンテを比較するにあたり、*unilinguismo* と *plurilinguismo* を使用し、*plurilinguismo* という用語によって、ダンテの作品にみられる複数の言語スタイルや語彙、音韻の使用を示した。つまり、ある個人の持つ複数言語が作品に表出している状態を *plurilinguismo* と形容したのである。しかし、その評価は否定的であり、*plurilinguismo* には文学上の価値が与えられなかった。それは美的芸術性を求める文学的視点を考慮すれば容易に理解できることで、単に既存の単語を並べただけのように見えるダンテの作品は文学としての条件を満たしておらず、そのために *plurilinguismo* は未熟な表現形式であると解釈されたのである。

コンティーニのこの評価を契機として、イタリアの文学界は *plurilinguismo* という用語

を広く使用し始める。しかし、その後の論者は、コンティーニが表明した **plurilinguismo** に対する否定的評価をそのまま継承したわけではなかった。その一例に、Pasolini (1954) があげられる<sup>9)</sup>。

20世紀の作家カルロ・エミリオ・ガッダ (1893-1973) の作品に対する論文 “*Gadda: Le novella dal Ducato in fiamme*” 「ガッダ：燃える公国からの短編小説」<sup>10)</sup> (1954) において、パゾリーニはガッダの使用言語に関する批判に対し反論を試みているが、そこにはコンティーニが使用した意味での **plurilinguismo** の考え方を読み取ることができる。

ガッダのバロック様式は現代のものである。(まさに!) それは以前の1600年代の様式の類であり、コンティーニが **plurilinguismo** と定義したイタリア文学の一つの形式である。ガッダの様式は、ペトラルカの **unilinguismo**、つまり完全なまでに歴史とは切り離されており、イタリア語 — フィレンツェ語文学の模範として位置づけられている最も純粋な言語とは対照的なものであった。

(Pasolini 1954 : 274-275/拙訳/ ( ) は原文ママ)

バロック様式とは1600年代末期から1700年代に隆盛した美術や文化様式のことである。ガッダの作品は誇張的で、装飾を多用していることから、バロックの特徴と重ね合わせ、「現実的なバロック様式」とパゾリーニは評している。そして、ガッダの作品はコンティーニが定義した **plurilinguismo** に分類されると位置づけ、ペトラルカの **unilinguismo** とは対照的であるとも論評している。

パゾリーニは続いて、芸術用語を用い、ガッダの文学がパスティッシュであると断ずる。ここでのパスティッシュとは、様々な作品からの借用や模倣を行った寄せ集めを意味する。なぜなら、ガッダは国家語よりは地方語を使用し、さまざまな方言を用いているからである (Ibid. : 275)。また、地方に寄り添い、ある地域に限定されるにせよ方言を用い、その表現は自由すぎるほどであった。このような解釈を踏まえてパゾリーニは、ガッダの作品を **plurilinguismo** と呼び、それをオリジナルの文学であると評した。そして、衰退しつつある文学界において、ガッダは根本的な変化を生み、1900年代の中心的存在となり (Ibid. : 276)、国家語に新風を吹き込み、驚異的な言語使用を実践した本物の第一級作家である (Ibid. : 278) と形容したのである。

パゾリーニの論考は、このように **plurilinguismo** を高く評価するものであり、この用語を考案したコンティーニの評価と反する。コンティーニにとっては、ペトラルカの **unilinguismo**こそがすぐれた文学であったが、パゾリーニはコンティーニに異論を唱え、

ガッダの plurilinguismo を絶賛し、偉大な作家の登場を称えた。

パズリーニが、コンティーニによって創出された plurilinguismo という用語を援用したことから、この用語は次第に文学界で普及し始めた。ダンテやガッダに関する他の書評 (Camilucci 1959, 1960 ; Raimondi 1962) や詩人ジョヴァンニ・パスコリ (1855-1912) に関する書評 (Mengaldo 1963 ; Pianezzola 1965) においても plurilinguismo は使用されるようになり、イタリアの文学界において plurilinguismo は「一人の作者、もしくは一つの作品内で複数の言語スタイルや言葉の使用」<sup>11)</sup> を意味する用語として今や定着している。

文学作品の批評において、plurilinguismo が使用されるようになると、演劇作品においても同様の傾向が発生した。その一つは Folena (1958) である。言語学・文献学者のジャンフランコ・フォレーナ (1920-1992) は “L’esperienza linguistica di Carlo Goldoni” 「カルロ・ゴルドーニの言語経験」(1958) において 18 世紀のヴェネツィアの劇作家で喜劇の父とも称されるカルロ・ゴルドーニ (1707-1793) に言語の複数性がみられることを plurilinguismo と形容した (Folena 1958)。フォレーナによれば、18 世紀のヴェネツィアは貿易都市として栄え、コスモポリタン性を備えていたことから、聴衆の共通語は北イタリアにおいて教養ある言語、いわゆるイタリア語-フィレンツェ語を使用していた<sup>12)</sup>。そのため、ゴルドーニは初期作品においてはどのような登場人物に対しても、ほぼフィレンツェ語の影響にある方言を用いていたが、それでは自由に表現できなかつたと分析する。(Ibid. : 23-24)。しかしながら、ゴルドーニは 1742 年の *Memoires* 『記憶』において、フィレンツェ語の中に、多少の方言を混在させるようになり、その後の 1762 年の *Le Baruffe chiozzotte* 『キオッジャの乱闘』に至っては、キオッジャ (ヴェネツィア県にある都市) やヴェネツィア、フィレンツェの方言を使用するようになった。このようにゴルドーニは劇作家としてヴェネツィア方言に傾倒していった (Ibid. : 29)。フォレーナはこの plurilinguismo と形容したゴルドーニの技法に関して、以下のように評している。

ゴルドーニに見られる、表現形式や感覚、台詞の隠喩の可変性や多様性は、比類なき演出である。文法以前の純粋なパロールとしての言語を、つまりラングの中に凝縮され、硬化する前の、生まれたてのはかない状態にある言語を、ゴルドーニ以前には、だれも気にも留めていなかった。

(Ibid. : 37/拙訳)

ここでフォレーナはソシュールの用語を用いてゴルドーニの表現手法を分析している。ゴルドーニは可変性や多様性のある表現形式、つまり多彩な言語変種を用い、舞台

を生き生きと演出したのであり、その言語変種はラング以前の純粹なパロールで、ゴルドーニのようにそれを表現した者は過去におらず、ゆえにゴルドーニ作品はその表現形式によって他より優れているのである。また、このヴェネツィア語とイタリア語の新たな共存関係は、ヴェネツィアという開かれた空間と国際感覚の中でこそ成立するもので、かつ、舞台感覚と人間性を持ち得たゴルドーニの言語があったからこそ可能であった (Ibid. : 37)。

つまり、この論文も plurilinguismo に対して肯定的な評価を示している。フォレーナは、もともとヴェネツィア方言は風刺表現や言葉遊びの発展によって更新され、型にはまることなく価値が上昇したと分析している。ゴルドーニの使用した言語も含め、何世紀にもわたって成り立ってきたヴェネツィア文学は plurilinguismo の勝利であると結論付け、これを賞賛している (Ibid. : 54)。

この演劇批評における plurilinguismo の用法は、その後も他の評論家 (Avelle 1964 ; Mengaldo 1965) によって用いられ、plurilinguismo は演劇において言語使用のスタイルとして定着していった。

1950年代は、文芸批評において plurilinguismo という概念が誕生し、展開を見せた時代である。用語の創出当初は、統一性を欠くダンテの作風を plurilinguismo と形容したことから、plurilinguismo は決して高い評価を受けなかった。というのも、文学界では規格化された形式こそが重視されていたからである。しかしながら、イタリアでは早い段階から、plurilinguismo に対する消極的な評価を覆す批評が発生する。この plurilinguismo に関する評価は文学界にとどまることなく、その後、言語学界へと展開する。

#### 4.2. 文芸批評から言語学へ (1960年代)

1950年代以降、文芸批評において plurilinguismo の使用が定着する一方で、1960年代には、言語学への展開が見られるようになる。

文献学者アウレリオ・ロンカーリア (1917-2001) の辞書学における貢献はその一例である。ロンカーリアはヨーロッパ最古の辞書の一つに関する論文 “Bilinguismo esterno e plurilinguismo interno nelle *Glosse di Kassel*” 「『カッセルの用語集』に見られる表面的 bilinguismo と内部的 plurilinguismo」 (1962) において plurilinguismo の考察を試みた。*Glosse di Kassel* は8世紀から9世紀に書かれたドイツ中部のカッセル地方に現存する修道院僧の手書きの辞書であり、ロマンス語系の見出し語をドイツ語に翻訳した二言語辞書である (Roncaglia 1962)。

ロンカーリアは *Glosse di Kassel* について、表面的にはドイツ語 (古代高地ドイツ語)

とロマンス系言語との二言語対応のバイリンガル辞書であるが、言語の内部構造の分析の結果、ここには *plurilinguismo* が認められると指摘した。なぜなら、様々な研究者<sup>13)</sup>が見出しとなっているロマンス語の音韻について、ラテン語や俗ラテン語<sup>14)</sup>、プロヴァンス語、フランス語、イタリア語であるとたびたび判断しており、かつバイエルン地域におけるラテン語化のなごりであるとする仮説もあるなど、なかなか一般化しがたい状況だからである。このように多様なロマンス語系音韻が現れる見出し語を、言語の内部構造からみた *plurilinguismo* と形容した (Ibid. : 347)。

ロンカーリアは9世紀にその地域<sup>15)</sup>において、なぜラテン語を起源とするものの、統一性のないロマンス語を見出し語とする辞書が存在するのか、その解明を試みている。ロンカーリアはこれまでの *Glosse di Kassel* に関する研究を検討したうえで、この辞書がロマンス語系のガッロロマンツォ語の環境下で編集され、ドイツのフライジング (ドイツのカトリック教会の大司教区であり現在のバイエルン地域) で転写されたと判断する。しかしながら、そのロマンス語系言語はガッロロマンツォ語へと集約されたわけではなかった (Ibid. : 349-350)。

ロンカーリアはさらにこの辞典の歴史的背景をも検証する。この辞書が編纂されたドイツ中部には土着の古代ローマ文化があり、ローマ帝国時代に遡るキリスト教会が存続していた。しかし、8世紀のフランク王国メロヴィング朝<sup>16)</sup>の支配の終焉後には、バイエルンの支配が及ぶようになり、教会ではバイエルンの教会と司教、つまりバイエルン人によるカトリック支配が土着のローマ系住民に向けて行われたに違いないと分析する。その状況下で編纂されたこの辞書には、日常生活や農業、工業などに関する語彙は収録されているものの、教会に関わる専門用語は収録されていない。なぜなら、それはローマ系住民がバイエルンの支配下となった教会の運営に関わるようになり、バイエルン人修道士との意思疎通のための言語としては日常の語彙がより重要であり、教義に関わる用語は重視されていないからである。辞書に現れているロマンス語系言語の多様性は、その土着の言語グループがもつ言語の多様性を示すものではあるが、それは編纂時に一つの言語として価値を認められることも規範化されることもなかったのである (Ibid. : 352-353)。

また、ロンカーリアは *Glosse di Kassel* における内部的 *plurilinguismo* を以下のようにも解釈している。

*Glosse di Kassel* に見られる内部的《*plurilinguismo*》は、文学言語として必要な数も規則も持ち得ない少数言語話者の否定的な状況を示す。国家語 (ドイツ語) とは異なり、

少数住民（ロマンス語系住民）の言語の中に plurilinguismo を読み取ることができる。なぜなら、少数言語は外部からの影響を受けるばかりで、より複雑になり、理解が困難になるばかりだからだ。

(Ibid. : 357/拙訳/《 》ママ/ ( ) は引用者による補足)

この辞書の見出し語に認められる plurilinguismo は少数言語の宿命を示しているのである。バイエルン人がもたらしたルーツの異なるゲルマン語系高地ドイツ語という、威信のある言語の影響を受け、ロマンス語系言語はより多様化した。*Glosse di Kassel* の plurilinguismo は威信の乏しい言語がその形を失ってゆく状況を示しているのである。ロンカッリアは、ロマンス語系言語が威信の乏しい少数言語であったがゆえに、音韻がより複雑化し、それが辞書に現れたと推察した。

ロンカッリアはこれまで文芸批評において用いられていた plurilinguismo を言語学、なかでも辞書学分野で見出し語の音韻の多様性を解釈するために使用した。しかし、ロンカッリアは単に音韻の複数性の分析にはとどまらず、その背景をも分析する。ドイツ中部における支配者であるバイエルン人と被支配者であるロマンス語系話者との社会的・政治的関係性を解明するとともに、外的影響を多大に受け、変形されゆく少数言語の変容をも plurilinguismo の内に看取した。つまり、辞書の見出し語に見られる plurilinguismo を社会言語学的視点から考察し、その意義を解明したのである。

次に、1960年代の言語学におけるもう一つの参照例として、デ・マウロの論考をあげたい。民主的言語教育の提唱者であるデ・マウロが初めて plurilinguismo を用いたのは、イタリア語の変遷を社会的・歴史的視点から分析した *Storia linguistica dell'Italia unita* 『統一イタリアの言語史』(1963) の索引の中である。

*Storia linguistica dell'Italia unita* の本文に plurilinguismo の用語はみられないが、「主題索引」に plurilinguismo は掲載されており、本文中の二か所、17頁、ならびに298-301頁への参照がある。この二か所はいずれも、イタリアにおける少数言語地域である西アルプス共同体を論ずる項である。

西アルプス共同体とは、イタリア語とイタリア語系変種（リグーリア方言かピエモンテ方言）、フランス語とフランス語系変種（プロヴァンス語かフランコプロヴァンス語）の四言語併用（もしくはイタリア語系とフランス語系に大きく分けて二言語併用）を維持してきた地域である。1861年のイタリア統一よりおよそ300年前の1560年と1577年に、その地域を治めていたサヴォイア家によって二言語使用を認める法律が発布されたことや、イタリア統一期においても、サヴォイア家の制定したカザーティ法という教育

法によって、イタリア語とフランス語の二言語を使用する教育が認められたことなどから、複数言語の共存が保持された (De Mauro 1963 : 17-18, 298-301)。デ・マウロはその状況を以下のように分析する。

四言語併用 (つまり、リグーリア方言もしくはピエモンテ方言、プロヴァンス方言もしくはフランコプロヴァンス方言、イタリア語とフランス語の相互使用) は少数者と多数者の相互尊重にもとづくもので、今もなお継承されてきた、現実にも即した状況の現れである。

(Ibid. : 17-18/拙訳/ ( ) は原文ママ)

デ・マウロの構想した **plurilinguismo** とは、ある地域において複数の言語が使用されている状態であり、それは言語政策による言語の保護と互いの市民の尊重のもとに保持されてきた実現可能で現実的な状況である。ここでデ・マウロは、それまで論じられてきた **plurilinguismo** とは異なる意味において **plurilinguismo** を論じた。デ・マウロが考察する **plurilinguismo** は地理上の言語の複数性、つまり社会における多言語状態とその法的承認を示す。その点で、この **plurilinguismo** を社会言語学の文脈に位置づけることができる。

またその後、イタリアでの国外からの影響も、イギリスの社会言語学者ノーマン・デニソン (1925-) の説から読み取れる。デニソンは、ローマにおける社会言語学国際大会において、“Sociolinguistic aspect of plurilingualism” (1969) を発表する。その発表のはじめに「我々が最も目にし、最もよく知っている plurilingualism<sup>17)</sup> の多様性は、バイリンガリズムとの関連で、多く述べられ、語られている」と表明している (Denison 1969 : 255)。つまり、われわれにとって身近な複言語状況はバイリンガリズム研究においてすでに語られてきたものであるとし、スイスやフリウリ<sup>18)</sup> の多言語状況、バイリンガルやコードスイッチングの研究、またデニソン自身の言語変種の研究を振り返りつつ、それらすべてが **plurilinguismo** の視点をもつ研究であると主張した。

このように、1960年代のイタリアでは、それまで文芸批評の概念として定着しつつあった **plurilinguismo** が言語学の分野へも展開するようになった。そこでは、単に用語が借用されただけではなく、**plurilinguismo** が前提とする被支配者層や少数言語の特徴、また多言語状況や言語権の承認が論じられていたのである。**plurilinguismo** の持つ背景が考察されることにともない、社会言語学の視点をもって議論は深化していった。

#### 4.3. 言語教育への展開（1970年代）

1970年代になると、*plurilinguismo* は言語教育の概念へと展開する。これには民主的言語教育の提唱者デ・マウロの貢献があった。

デ・マウロが1960年代までイタリアで議論されてきた *plurilinguismo* を熟知していたことは論文“*L'Italia multilingue*”「多言語のイタリア」（1973）の中に読み取れる。この論文においてデ・マウロは *plurilinguismo* を以下のように理解していた<sup>19)</sup>。

*multilinguismo* は、このところ議論され、認識されているように、文学によって生み出されたものではない。ダンテやガッダの文学作品においてのみ見られるものではなく、マキャヴェリの時代からデ・サンクティスが散文を手掛けた時代においても *multilinguismo* は表れているのである。それだけではない。私たち話者の日常的で現実的な経験においても、また書き手の行為においても見られるのである。

(De Mauro 1973 : 271 / 拙訳)

デ・マウロは、イタリアの *multilinguismo* (*plurilinguismo*) は文学における言語スタイルの問題に限らないと主張する。イタリアの思想家ニコロ・マキャヴェリ（1469-1527）やフランチェスコ・デ・サンクティス（1817-1883）もまた、複数言語の特徴を持ち、支持する立場にあった。マキャヴェリは「我々の言語は、ダンテが創造し、マキャヴェリが記述し、フェッルッチョが話した」<sup>20)</sup> と言われているように、ダンテの言語を引き継ぐもので（De Mauro 1963 : 11）、また、デ・サンクティスは、1861年のイタリア統一以降、マンゾーニ（1783-1873）<sup>21)</sup> が理想とし、推進した単一言語に異議を唱え、方言を擁護した一人である（*Ibid.* : 82）。事実、デ・サンクティス自身の使用する言語は、四つの異なるスタイルの特徴を保持していた（*Ibid.* : 184）。つまり、デ・マウロは、イタリアでは文学界のみならず、過去のさまざまな論者も *plurilinguismo* の特徴を備え、主張してきたこと<sup>22)</sup>、そして現在の我々にとっても状況は変わらないと論評している。つまり、イタリアには常に複数言語が存在し、それを個人が使用している状態にあると指摘しているのである。

このようにデ・マウロはイタリアのこれまでの *plurilinguismo* に関する議論も踏まえ、社会言語学的な視点からイタリアの言語状況を理解したうえで、言語教育へと目を向けた。それは *Dieci Tesi* の発表と同年の論考“*Per una educazione linguistica democratica*”「民主的言語教育へ向けて」（1975）においても明確に示されている。デ・マウロはこの論考の中で *plurilinguismo* という用語を援用し、*una educazione plurilingue*（複言語教育）の必

要性を訴えている。

また、デ・マウロは1948年に施行されたイタリア共和国憲法の言語に関する三つの条文、すなわち「第3条：すべての市民は、等しい社会的権威を持ち、法律の前に平等であり、性、人種、言語、宗教、政治的意見、人的および社会的な条件によって差別されない」「第6条：共和国は、特別な規定により、言語少数者を保護する」「第21条：すべての者は、発言や文書、他のそれぞれの普及手段をもって、考えを自由に表現する権利がある」という条文を指摘する。そしてこのような理念を実現するためにも民主的言語教育が重要であると主張する (De Mauro 1975 : 116)。

次に、デ・マウロは憲法の条文を根拠とし、民主的言語教育によって実践されるべき五つの必須条件をあげる。第一に、イタリア共和国はいかなる固有言語にも特権を与えてはならないこと、第二に、いかなる言語変種にも特権を与えてはならないこと、第三に、それぞれの表現形式の平等性を認識すること、第四に、言語を理由に不平等行為を取ってはならないこと、そして第五に、**plurilinguismo** を制限してはならず、自由な表現に対して圧力をかけてはならないこと (Ibid. : 116-117)。この五つの必須条件の根底には、**plurilinguismo** の概念が通底しており、その保護を狙っている。デ・マウロは **plurilinguismo** の理念を備えた民主的言語教育こそが、憲法の保障する言語の平等を実践するものであると主張し、その必要性を訴えたのである。

これを受けてデ・マウロは、これまでの学校教育では単一言語を強いてきた教授法を複言語教育に移行させることが容易ではないと予測しつつも、方言や、粗野な下層階級の話し方などを認めることが重要であり、どのような社会階層であっても、すべての生徒を平等に評価することが重要であると説く。また、単一言語教育を行う現在の学校が被支配者階級の表現力を抑制していると批判し、学校が民主的言語教育を選択するのであれば、被支配者側に表現力という能力を付与し、社会内部に刺激を与える契機になると主張する。デ・マウロによれば、彼らの表現力を解放することが現在の階級社会を弱めることになるのである (Ibid. : 118-119)。

このように民主的言語教育の必要性を論じたうえで、デ・マウロは具体的な教育政策を次のように提言する。

地域や県レベルにおける、教師の再教育センターを組織することを要求する。それは私たちが重視する理論 (言語の複数性とその相互関係) と歴史 (イタリアの言語環境が複雑な複言語状況を持つこと。また、学校が無自覚のまま行ってきた言語選択の役割) といった民主的言語教育に欠くことができない一般概念の基礎を教師に伝えるた

めである。

(Ibid. : 123/拙訳/ ( ) は原文ママ)

デ・マウロはこのように、複言語教育を具現化するための政策として、**plurilinguismo** に関する理論や情報を教師に提供し、教員の養成や再教育のためのセンターを各地域に設置することを訴えたのである。

この論考を検討する限り、**Dieci Tesi** がデ・マウロの教育思想を反映していることは明らかである。と同時に、デ・マウロの構想した言語教育自体に **plurilinguismo** という理念があったことも確認できる。**Dieci Tesi** 「Ⅷ. 民主的言語教育の原則」の生徒たちの複言語能力を肯定する姿勢、あるいは「Ⅸ. 教師のための新たなカリキュラム」や「Ⅹ. 結論」で述べられる複言語教育とその政策はデ・マウロの主張そのものである。またこの論考には **Dieci Tesi** には収録されていない提唱者自身の教育理念として、民主的言語教育の五つの必須条件も詳述され、複数言語の平等が強く示されている。

このように、1960年代まで文芸批評や言語学界において議論されていた **plurilinguismo** は、1970年代にデ・マウロによって、本来のイタリアの言語状況であると理解され、多言語状況を容認する複言語教育への転換が訴えられたのである。イタリア共和国憲法は言語の平等を謳っているにもかかわらず、学校教育ではそれが実現していないことから **plurilinguismo** を保障する複言語教育を実践すべきであるとデ・マウロは認識し、**plurilinguismo** の概念を民主的言語教育へと発展させたのである。

## 5. 終わりに

本稿では、イタリアにおける **plurilinguismo** の起源と概念、評価の変容を検証し、デ・マウロが **plurilinguismo** に教育的価値を発見し、民主的言語教育の構想へ至るまでのプロセスを解明した。

イタリアにおける **plurilinguismo** は1950年代に文芸批評家のコンティーニがダンテの言語の複数性に着目し、それを **plurilinguismo** と名付けたことに始まる。コンティーニは文学作品に対する規範性を重んじたことから、**plurilinguismo** を高く評価しなかった。しかしながら、パズリーニが **plurilinguismo** の特徴を持つガッダの作品を絶賛したことにより、否定的評価は覆され、その後の文学批評や演劇批評もそれに続いた。その後、1960年代になると **plurilinguismo** は言語学界においても使用されるようになり、その用語や概念を取り巻く背景が考察されるようになった。ロンカーリアは辞書の見出し語に表れる

音韻の複数性を **plurilinguismo** と形容し、そこに少数言語話者の社会的・政治的地位や少数言語が外的変化を加えられやすいという特徴を見出し、デ・マウロはイタリアの西アルプス地域の多言語状況を **plurilinguismo** と呼び、言語権の承認により複数言語が共存状態を維持することを主張した。そして 1970 年代に、デ・マウロはこの **plurilinguismo** を民主的言語教育へと展開させた。

クルチやオリオレスが論じたように、19 世紀のパウルやシュハルト、また 1970 年代のヴァンドルシュカなどの「言語＝単一言語」という固定概念を覆す理論の誕生に **plurilinguismo** の起源を求めるならば、複数言語を話す行為は長らく否定されていたことになる。それは、単一言語の言語観から逸脱し、言語病理学的に異常と認識されていたためである。バイリンガル研究においても、1960 年代まで複数言語話者は知能が劣ると指摘され続けてきた。つまり、**plurilinguismo** は歴史の中では常に存在してきたにもかかわらず、受容しがたい概念であったのだ。しかし、イタリアに限るならば、1950 年代の文学批評は **plurilinguismo** に肯定的価値を見だし、社会言語的考察を経て、1970 年代にはヨーロッパの他国にもまして、イタリアでは早くから複言語教育の応用が試みられたのである。

この複言語教育の理論化に貢献したのがデ・マウロであった。デ・マウロはイタリアにおける **plurilinguismo** をめぐる議論の中で、その概念を考察し、憲法の条文を根拠とし、複数言語が存在する現実とそれを認めない学校教育の間に、大きな隔たりを剔出したのである。民主的言語教育はこの隔たりを縮めるために提唱されたものであるが、これはデ・マウロの教育理念としての **plurilinguismo**、つまり、複言語能力や複言語教育、その政策を内包しているのである。

多言語社会における言語教育の課題は、現代に限るものではない。今から 40 年前のイタリアにおいてもその課題は存在し、多様な言語に対峙し、複言語教育を目指す教育理念が存在したのである。そこに見られる **plurilinguismo** は、イタリアの特徴的な複言語状況を背景として、文学や言語学において議論され、深化し、デ・マウロによって言語教育理念へと統合された。それは結果的に現在、欧州評議会において論じられている複言語主義との親和性を持ち、先取りしているものである。

## 注

- 1) ここでのイタリア語とは、統一言語として位置づけられたトスカーナ方言に由来する「生きたフィレンツェ方言」を指す。

- 2) イタリア全土の中等教育進学者数とフィレンツェ語圏の人口からイタリア語話者数を算出している。統一期における各地の言語は、それぞれが個別言語ともいえるほどの違いがあり、互いのコミュニケーションは困難であった。国民の98%にとって、イタリア語は異言語であったとも述べている (De Mauro 1979 : 22)。
- 3) ヴァンドルシュカ,マリオ、福田幸夫 (訳)『言語間言語学 ヨーロッパ六か国の比較』(1974) の訳者による「前書き」より
- 4) パウル,ヘルマン、福本喜之助 (訳)『言語史原理』(1993) における訳。
- 5) パウル (1993) は言語の混用を主に外国語、つまり個別言語の転用として論じている。ただし、方言に関しても同様の混用が見られると章の最後で言及している。
- 6) Pisani Vittorio (1962)
- 7) *Grande Dizionario della Lingua Italiana* (1986) には Montale, E. による *Auro da fê* (1966)、Compagnone, L による *L'amara scienza* (1965)、Pasolini, P.P による“*Gadda: Le novelle dal Ducato in fiamme*” *Passione e ideologia* (1953) (辞書には1953年と記載されているが出版年は1954年)から plurilinguismo の例文が出典されている。いずれもコンティーニ (Contini 1951) より新しい。
- 8) 俗語とは民衆による話し言葉を指し、ネオラテン語に起源を持つ。教養ある言語として、また優れた文学言語として尊重されるラテン語とは対立する。
- 9) Orioles (2006) にも、参照が見られるが、plurilinguismo の存在を提示するに留まり、コンティーニが使用した plurilinguismo との評価の違いを言及していない。
- 10) *Le novella dal Ducato in fiamme* は1931年~1951年まで雑誌に掲載され、1953年に出版されたガッダの短編小説集。
- 11) De Mauro (1999) を参照。
- 12) 本文中にはイタリア語、もしくはトスカーナ語と表記されているが、本稿での統一性を図るためにフィレンツェ語に統一する。
- 13) Eckart, Grimm, Diez, Sittl, Monaci、Holtzmann などの名前があげられている
- 14) 原文は basso latino である。latino tardo と同義であり、4世紀以降のラテン語の進化した段階を指す。
- 15) ガリア地域東部 (現在のドイツ) を指す。紀元前2~3世紀にこの地域はローマの属州であり、ラテン語から派生したガッロロマンツォ語の地域であった。ところが481年にフランク諸部族によって統一されフランク王国下に入り、以降、ゲルマン語系の影響を受けるようになる。*Glosse di Kassel* が編纂された9世紀は、フランク王国の勢力が弱まり、同じくゲルマン語系・高地ドイツ語を話すバイエルン人による支

配が始まっていた時期でもある。そのためロマンス語系言語は当時、存在していたであろうが、この地域での威信は低かった。

- 16) メロヴィング朝 (5 世紀後半～8 世紀半ば) はフランク王国最初の王朝である。ゲルマン人に起源を持つフランク人、サリ族のメロヴィング家が各部族を統一したことに始まる。
- 17) Denison (1969) の plurilingualism は bilingualism と同じ文脈にあり、個々人の能力に関して述べていると推測される。ここでは原文のまま使用する。
- 18) イタリア北東部に位置し、オーストリアとリトアニアに隣接する。ヴェネト語、フリウリ語、ラディーノ語、スロベニア語、ドイツ語などを話す多言語地域。
- 19) その頃、デ・マウロは plurilinguismo と multilinguismo の使い分けを厳密には区別していなかった。そのため、索引においては plurilinguismo を、参照個所では multilinguismo を使用している。
- 20) 作家ルイジ・セッテンブレ (1813-1876) による言説。フェッルッチョは中世フィレンツェ共和国の兵士を率いた指揮官フランチェスコ・フェッルッチ (1489-1530) を指す。
- 21) 詩人であり作家である。1868 年に教育省委員長となり、フィレンツェ語 (トスカーナ方言に由来する「生きたフィレンツェ方言」) をイタリアの唯一の言語として、言語統一を図った。
- 22) これはイタリアで 16 世紀から 19 世紀にかけて行われた言語論争である questione della lingua (言語問題) に関連する。イタリア半島においては、ラテン語に台頭する共通語として、どの俗語に言語の威信を与えるか継続的な議論があった。糟谷 (1985) 参照のこと。

## 文献

- ヴァンドルシュカ, マリオ、福田幸夫 (訳) (1974) 『言語間言語学 ヨーロッパ六か国の比較』、白水社。
- 糟谷啓介 (1985) 「16 世紀イタリアの<言語問題>」、『一橋研究』、10 巻 3 号、19-35。
- 西島順子 (2018) 「1970 年代のイタリアにおける民主的言語教育の構築 — トゥッリオ・デ・マウロの構想した言語教育と plurilinguismo —」、『人間・環境学』、27 巻、1-15。
- 西山教行 (2010) 「複言語、複文化主義の形成と展開」、細川英雄・西山教行 (編) 『複言語・複文化主義とは何か — ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈』

化へ』、くろしお出版、22-34.

パウル、ヘルマン、福本喜之助（訳）（1993）『言語史原理』、講談社。

Avelle, D. S. (1964). “Cardo Maria Maggi. –*Il Teatro Milanese*, a cura di Dante Isella.–, *Giornale Storico della Letteratura Italiana, Vol.141* . Torino: G. Chiantore, 451-457.

Baker, C. (2011). *Foundation of Bilingual Education and Bilingualism*, Bristol: Multilingual Matters.

Balboni, P. E. (2009). *Storia dell'educazione linguistica in Italia*, Torino: UTET.

Battaglia, S. (1986). *Grande dizionario della lingua italiana*, Torino: UTET.

Camilucci, M. (1959). “Roma e il “Pasticciaccio” di C. E. Gadda”, *Studi Romani, n.7*, Roma: Istituto Nazionale di Studi Romani, 315-319.

Camilucci, M. (1960). “Roma nei prosatori contemporanei”, *Studi Romani, n.8*, Roma: Istituto Nazionale di Studi Romani, 34-51.

Contini, G. (1951). “Preliminari sulla lingua del Petrarca”, *Paragone Letteratura, n.2*, Firenze: Sansoni, 3-26.

Costanzo, E. (2003). *Language education (educazione linguistica) in Italy: An Experience that could Benefit Europe?*, Strasbourg: Council of Europe.

Coste, D., Moore, D. & Zarate G. (1997). *Competence plurilingue et pluriculturelle : Vers un Cadre Européen Commun de référence pour l'enseignement et l'apprentissage des langues vivantes: études préparatoires*. Strasbourg: Conseil de l'Europe.

Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessments*, Cambridge: Cambridge University Press.

Council of Europe (2007). *Guide for the Development of Language Education Policies in Europe, Language Policy Division*. Strasbourg: Council of Europe.

Cummins, J. & Swain, M. (1986). *Bilingualism in Education: Aspects of theory, research and practice*, London and New York: Longman.

Curci, A. M. (2005). “Educazione linguistica come educazione plurilingue”, *DAF-Werkstatt, 6*, Arezzo: DAF Arezzo Ed., 59-70.

De Mauro, T. (1963). *Storia linguistica dell'Italia unita*, Bari: Laterza.

De Mauro, T. (1973). “L'Italia multilingue” *Le parole e i fatti*, 1977, Roma: Riuniti. 269-272.

De Mauro, T. (1975). “Per una educazione linguistica democratica”, *Scuola e linguaggio*, 1981, Roma: Riuniti, 88-123.

- De Mauro, T. (1979). *L'Italia delle Italie*, Firenze: Nuova Guaraldi.
- De Mauro, T. (1999). *Grande dizionario italiano dell'uso*, Torino: UTET.
- Denison, N. (1969). "Sociolinguistic aspects of plurilingualism", *Giornata internazionali di sociolinguistica. Secondo congresso internazionale di scienze sociali*, Roma: Istituto L. Sturzo, 255-297.
- Ferreri, S. & Guerriero, A. R. (1998). *Educazione linguistica vent'anni dopo e oltre: che cosa ne pensano De Mauro, Renzi, Simone, Sobrero*, Firenze: Scandicci.
- Folena, G. (1958), "L'esperienza linguistica di Carlo Goldoni", *Lettere Italiane, vol.10*, Arona: Paideia, 21-54.
- GISCEL (1975). *L'educazione linguistica: Atti della giornata di studio Padova 17 settembre*, Padova: Cooperative libreria editrice degli studenti dell'università di Padova.
- Lo Duca, M. G. (2013). *Lingua italiana ed educazione linguistica*, Roma: Carocci.
- Martinet, A. (1952). "Introductory Remarks", *Proceedings of the seventh international congress of linguists London, 1-6 Settember 1952*, London. C.I.P.L. 439-441.
- Mengaldo, P. V. (1963). "Alfonso Traina. —Saggio sul latino del Pascoli.—", *Giornale Storico della Letteratura Italiana, Vol.140*, Torino: G. Chiantore, 254-267.
- Mengaldo, P. V. (1965). "Mario Baratto —Tre studi sul teatro (Ruzante — Aretino — Goldoni) —", *Giornale Storico della Letteratura Italiana, Vol.142*, Torino: G. Chiantore, 111-117.
- Orioles, V. (2006). "Genesi, vicende e 'statuto' del termine plurilinguismo", *Percorsi di parole*, Roma: il Calamo, 199-207.
- Pasolini, P. P. (1954). "Gadda: Le novelle dal Ducato in fiamme", *Passione e ideologia*, 1985, Torino: Einaudi, 274-278.
- Pianezzola, E. (1965). "Gli aggettivi verbali in - *Bundus* nei Carmina del Pascoli" *Lettere Italiane, Vol.17*, Arona: Paideia, 209-219.
- Pisani, V. (1962). "Recensione di A. W. Weiss: Hauptprobleme der Zweisprachigkeit e W. T. Elwert: Das zweisprachige Individuum", *Paideia, Vol.17*, Brascia: Paideia, 279-286.
- Raimondi, E. (1962). "Rito e Storia nel canto I del Purgatorio", *Lettere Italiane, Vol.14*, Anora: Paideia, 129-150.
- Roncaglia, A. (1962). "Bilinguismo esterno e plurilinguismo intero delle *Grosse di Kassel*", *Atti del VIII congresso internazionale di studi romanzi (Firenze, 3-8 aprile 1956)*, Firenze, 347-358.

# **The historical transition of ‘plurilinguismo’ in Italy : Until the proposal for democratic language education in 1975**

**NISHIJIMA Yoriko**

Keywords: plurilingualism, plurilinguismo, Italy, democratic language education, Tullio De Mauro

## Abstract:

The purpose of this paper is to elucidate, through a discourse analysis, the origins and conceptual changes of ‘plurilinguismo’, which was to develop into a concept fundamental for the language education in the 1970s. This language education called ‘democratic language education’ has an affinity with CEFR’s plurilingualism in terms of its ‘plurilingual ability’, ‘plurilingual education’ and ‘plurilingual education policy’. The notion of plurilinguismo first appeared, in literary criticism of the 1950s in Italy, in the discussion on Dante’s use of multiple languages. Initially, plurilinguismo was used in a negative sense, as literature without norms. Thereafter, plurilinguismo had come to be accepted positively by writers who acknowledged the use of multiple languages. In the 1960s, plurilinguismo began to be discussed in linguistics, whereby its background, the social status and language rights of minority language speakers, was outlined. In the 1970s, the linguist Tullio De Mauro conceived a democratic language education based on plurilinguismo. While in linguistics, the concept of using multiple languages had not been seen favorably, in Italy, its positive values were acknowledged in literary circles of the 1950s and would be incorporated into plurilingual education as early as in the 1970s.

(京都大学大学院 人間・環境学研究科)